

特別寄稿 特集「COVID-19」

ダイヤモンド・プリンセス号での救護活動

大岩 孝子

静岡赤十字病院 救急科

要旨：2020年2月、横浜港に着岸したクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」に日赤救護班として派遣された。未知の感染症であるCOVID-19（新型コロナウイルス感染症）の大規模クラスターとなってしまった船内では世界初となる船内での検疫が行われていた。情報は不足し、各支援団体の活動も混乱を極めていた。我々救護班は、主に船内メディカルセンターでの診療を担い、未曾有の惨事の中でも職務を全うしようとする船員達と一緒に、不安にかられる乗客に対応した。手探りの活動が行われ、言語や環境の問題、二次感染のリスクなどを痛感したが、粛々と任務をこなし、帰宅後2週間の隔離を無事終え、通常業務に復帰した。それから約9カ月経過したが、まだCOVID-19との共存はできていない。

Key words：ダイヤモンド・プリンセス号、クルーズ船、新型コロナウイルス、COVID-19、検疫

【背景】

新型コロナウイルスの集団感染が起きたクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」は2020年1月20日、横浜港を出発し、鹿児島、香港、ベトナム、台湾、および沖縄に立ち寄り、2月3日に横浜港に帰港した。横浜港寄港時、世界57カ国から船員1,068人乗客2,645人の計3,713人が搭乗していた。航行中1月25日に香港で下船した80代の乗客が、2月1日に新型コロナウイルス陽性であることが確認されたため、厚生労働省は当初、船を洋上に停泊させたまま検疫官が乗り込む「臨船検疫」で対応したが、その後、横浜港に着岸させ潜伏期を鑑み14日間の予定で検疫を開始した。ウイルス検査は当初は発熱などの症状がある人や、濃厚接触者に限っていたが、陽性者が相次いで見つかったため、全員検査に方針を転換した。最終的にのべ4,000人超を検査し、その結果、確定症例712例が確認され、少なくとも14例の死亡が確認された(致命率2.0%)。また、その他に検疫官や船会社の医師ら外部から対策に入った9人の感染が確認された。

【検疫の状況】

乗客は基本2名部屋の船室に隔離され、当初は体温37.5℃以上を認めた場合、発熱コールセンターへ連絡し、船内のDMATを中心とした医療チームに照会され、新型コロナウイルスの検査が行われた。また、船内に常設されているメディカルセンターでも原則発熱のない体調不良者の診療をした。ウイルス検査の結果、COVID-19陽性者は下船し、国内の病院に入院し治療、隔離された。陽性者の同室者は「濃厚接触者」として検査され、陽性であった場合は同様に下船し病院に入院し、陰性であった場合は、陽性患者との最終接触日から14日間船内での隔離となった。また、ウイルス検査結果不明者や未実施の有症状者でも、医療機関の診療が必要と判断されれば、下船し、病院へ搬送された。一部の船員は、船の運航を維持するために、検疫下においても限定的ではあるものの勤務を継続した。このため、検疫期間中乗員は、乗客ほど完全に隔離はされていなかった。

【静岡赤十字病院救護班の活動】

検疫終了後の統括として、上記内容が報告されているが、2020年2月16日から18日に静岡赤十字病院救護班（医師1名、看護師2名、薬剤師1名、事務1名）の派遣が決定された際は、これほど整理された情報はなく、『日赤救護班は船内のメディカルセンターの診療補助を行い、COVID-19の患者を直接みることはない、船内のゾーニングはなされており、日赤救護班は船内に宿泊し、食事はクルーズ船の好意により船内で提供されている』といった内容を聞いたことを記憶している。当院救護班の派遣以前にも、全国の赤十字病院からDMATや日赤救護班として派遣されたチームが複数あったようだが、未知の感染症に対する世界でも初の船内検疫であり、混乱を極めており、更に風評被害等も鑑み秘密裡での活動となっていたため、情報が集まらず、不安を抱きながらの活動とならざるを得なかった。

静岡から車で移動し、横浜港に到着した。港には各病院の救護車や民間救急車などが多数駐車していた。前救護班からの申し送りを受け、これまでの災害医療と同様に、船内では複数の団体（厚生労働省、自衛隊、DMAT、DPAT、日赤救護班、薬剤師会など）が活動し、更に船内は船長を首長としたある意味外国であり、船員達なくしては、船内活動は不可能であり、指揮命令が複雑であることを理解した。私たちは前もっての指示どおり、船内メディカルセンターでの診療が主な活動内容であったが、臨機応変に変化する任務にも対応しなければならなかった。

メディカルセンターは、船員である医師、看護師複数名が常駐し、5つの区切られた診察室があり、乗客情報などとリンクした電子カルテを使用し、単純X線、12誘導心電図、簡易血液検査測定器、ベッドサイドモニタなどの医療機器や一般的な薬剤が整えられた立派な施設であった。船員医療者と協力しながら診療を行っていたが、災害の間ではよくある事だが、派遣スタッフの活動内容や人数が数日毎で変化するため、明確な役割分担はできておらず、手探りの状況での活動となった。船

員医療者も多国籍であり、まずは彼らとのコミュニケーションが課題であったが、船員医療者には日本人も複数名おり、また語学堪能な救護班員の活躍もあり、よい雰囲気での協力しあえたと思う。もちろん船員達は未曾有の出来事に非常に困惑しており、疲労も明らかだったが、医療者として仕事を全うする気概が感じられた。私達救護班の活動も試行錯誤であったが、一緒に診療を行っていく過程で、船員医療者達は私達を受入れ、感謝の意も感じられた。ただ大きな懸念は、メディカルセンターにおけるゾーニングが全くできていないことだった。私達は、その他の検疫・救護スタッフと同様、患者（乗客）と接するときは、ガウンなど標準的防護策を行ったが、一緒に働く船員達はPCR検査を受けておらず（船員達の検査は後回しになっていた）、船員医療者たちは「もう今更」という感覚なのか、ほとんど感染対策をしないまま診療を行っていた。いわゆるスタッフステーションでは無防備な船員医療者達と接して活動し、メディカルセンターの構造からも完全なゾーニングは不可能であった。私達の食事と就寝だけは一応クールゾーンと思われる（結局そこにも船員の出入りを100%無くす事はできなかった）場所で行ったが、「これでは二次感染も仕方ない」と思ったのは私だけではなかったと思う。活動終了後に、ネットやニュースでこのクルーズ船の感染対策の問題点を指摘・問題視する報道をみたとき、「まさしく、よくぞ言ってくれた」と思ったが、そのことをその場で上層部に提言できなかったことは班長として反省もしたし、すべての関係者が皆必死に活動していたのも事実で、中傷するのはまた違うと感じた。

私達が派遣された期間は、原則として、乗客の診療は電話にてトリアージされ、COVID-19を疑う有症状者はDMAT医師らが部屋を来訪し診察することとなっていたが、それ以外の有症状者はメディカルセンターを受診し、診療を受けることになっていた。しかし、発熱患者でも症状が重篤と思われる患者はメディカルセンターで診療を行うこともあり、実際、PCR検査を実施済でも結果

がすぐ判明しないことや、結果が本人や私達医療スタッフに適宜情報共有されないため、私達が診療した患者の中にCOVID-19患者がいたことは間違いない。COVID-19の特徴として、急激に状態が悪化することがわかっていたため、倦怠感などが続く患者は、検査結果を待たず、積極的に医療機関への搬送を依頼した。実際、急激な呼吸不全をきたした患者をメディカルセンターで診療し、当初急性冠症候群による心不全を疑い、非侵襲的陽圧換気（noninvasive positive pressure ventilation：NPPV）を装着し救急搬送を行ったため、私は救急車に同乗したが、後日その患者がCOVID-19陽性であったことが分かって非常に動揺した。このような医療機関への搬送については日赤救護班が直接かかわることは少なかったが、受け入れ交渉や搬送手順など極めて困難であることも痛感した。受け入れ先となっている病院のスタッフたちの重責も実感した。

前の派遣チームも話していたことだが、2泊3日の活動は短かく、やっと活動内容がわかってきたところで交代というもどかしさがつきまとうが、緊張を強いる3日間であり、終了したときは本当に胸を撫で下ろした。世界各国が独自に国民の下船・帰国を始めたこともあり、乗客の数も日に日に少なくなったため、診療を必要とする患者も決して多くはなかったが、患者は皆不安に駆られて

おり、対応には非常に気を遣った。同時期に派遣された大阪赤十字の国際医療救援チームには非常に助けられ、感謝しかない。活動終了後、全員2週間の自宅待機期間を必要としたが、班員全員感染しておらず、無事に活動を終わられたことは非常に幸運だったと思う。

今後も当院は急性期病院としてCOVID-19への対応は否応なしに求められる。日々積み重ねられる情報を正しく理解し、正しく恐れ、正しく立ち向かい、現時点で有効と思われる対応策を地道に行っていくことが望まれる。一気に解決するような対応策は期待せず、COVID-19と共生できるまで、堅実な対応を行うのみと考える。今回の救護活動は、非常に貴重な体験であった。

参考資料

- 1) 山岸拓也, 神谷元, 鈴木基ほか. ダイヤモンド・プリンセス号新型コロナウイルス感染症事例における事例発生初期の疫学. IASR 2020;41(7):106-8.
- 2) 国立感染症研究所:現場からの概況:ダイヤモンドプリンセス号におけるCOVID-19症例: [internet]. <https://www.niid.go.jp/niid/ja/diseases/ka/corona-virus/2019-ncov/2484-idsc/9410-covid-dp-01.html> [accessed 2020-12-01]